関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

# アーサー・エヴァンズ卿とクノッソス宮殿 : 古代遺跡とそのイメージ形成をめぐる考察



| | |
|---|---|
| 著者 | 中澤 務 |
| 雑誌名 | Semawy Menu |
| 巻 | 1 |
| ページ | 67-76 |
| 発行年 | 2010-03-08 |
| その他のタイトル | Sir Arthur Evans and the Palace of Knossos: On the Image-Formation of the Ancient Society |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/9404 |

# アーサー・エヴァンズ卿とクノッソス宮殿
## —古代遺跡とそのイメージ形成をめぐる考察—

中澤 務 *

# Sir Arthur Evans and the Palace of Knossos:
## On the Image-Formation of the Ancient Society

Tsutomu NAKAZAWA*

[Abstract]

Our images of the Mediterranean ancient civilizations were formed through the excavations and researches made by modern European countries. However, do these images reflect the ancient civilizations properly? In this paper, I take up the case of the excavation of "Palace of Knossos" by Sir Arthur Evans and reexamine the process of image-formation of this archaeological site.

(1) Influence of Greek Myth

Evans had been deeply influenced by the Greek Myth of "the King Minos and the Labyrinthos". Evans believed that the building he found must be the King Minos' Labyrinthos (Fig.2). When he found a room in which a stone chair was installed, he concluded that this was the room of the king and named it "The Throne Room." He rehabilitated the room completely through many conjectures (Fig.3). His interpretation of this building as the king's palace is uncertain. We must admit that this is the image made by Evans influenced by the Greek Myth.

(2) Influence of Modern European Culture

The image-formation of the Knossos and the Minoan Culture was also influenced by the modern European culture. Europeans found that the aesthetic taste of ancient Minoans was similar to theirs (Fig.4, 5). For example, they believed "Dolphin Fresco" in the "Queen's Megaron" as the manifestation of the love towards nature and formed a romantic image of the Minoan culture (Fig.6, 7), but it is not certain whether such remains are manifestations of their own naturalism. This seems to be the typical case of the image-formation problem.

(3) Prince of the Lilies

Evans reconstructed the notorious fresco "Prince of the Lilies" (Fig. 9). Evans (and E. Gilliéron) put together few remains of the fresco and fabricated a clear image of the "Priest King." In fact, their reconstruction was dubious. Many scholars have tried to present a new reconstruction, but Evans' original image has been so influential that we cannot get rid of its power even today (Fig.10, 11).

* 関西大学文学部 (Kansai University, Faculty of Letters)

## 1　はじめに

われわれは、古代の社会を直接経験することはできず、いわば間接的に、幸運にも現代まで生き残ってきたわずかの痕跡、つまり遺跡やそこから出土する様々な遺物をとおして経験する。そのようなものを理解しようとするとき、われわれは、推測や想像力を働かせて、わからない部分を補い、その全体像を再構成しようとする。このときにわれわれが使うのが、「イメージ」の力である。たとえば、古代エジプト人とはどのような人たちであり、どのような生活をし、どのような社会を営んでいたのかについて、われわれは多くの部分を知らない。しかし、われわれは、限られた痕跡を頼りに、欠落した部分を妥当な仮説によって埋めながら、ひとつのイメージを形成し、その全体像を再構成しようとするのである。イメージは、様々な歴史的研究の過程をとおして形成され、新聞や書物、映画やテレビなどを通じて普及し、共通のイメージとして定着していくことになる。

このイメージ形成の問題を考えるさいに、われわれは、われわれの持つ先行的知識がイメージ形成に及ぼす影響を、無視することはできない。われわれが、未知の部分を推測や想像力によって補おうとするとき、われわれは、われわれが既に所有している知識を使って解釈を行い、われわれが既に所有しているものの見方に従って、その意味を考えようとするからである。われわれの持つ古代遺跡のイメージは、先行的知識に影響された解釈の試みを通して形成された歴史的産物なのであり、われわれは、先行知識の影響から容易に逃れられるものではない。それゆえ、われわれはまず、過去の歴史的な経緯を正しく認識し、現在のわれわれの状況を相対化し、反省を加えておかなければならないのである。

では、古代エジプト文明や古代ギリシア文明などの古代地中海文明の、歴史的なイメージ形成はどのようなものであったろうか？そこに、イギリス・ドイツ・フランスなどの近代ヨーロッパ諸国の視線が大きく関わっていることは否定できない。それは、19 世紀にヨーロッパ諸国によって再発見された。そして、ヨーロッパ諸国による発掘と研究をとおして、そのイメージが形成されていったのである。こうして形成されたイメージは、現在でもわれわれの古代文明観を支配し続けている。そこで、われわれはまず、このようなところから幅広い歴史的事例研究をおこなっていく必要がある。

本論文では、こうした古代地中海文明の遺跡イメージの比較研究の一環として、クレタ島のクノッソス遺跡の発掘を取り上げる。この有名な古代遺跡は、古代文明に対するイメージ形成過程を考える上での最良の素材と考えられるからである。本来はこれにエジプトの事例との詳しい比較分析を加える必要があるが、今回は経過報告ということで、この部分は次回以降に取り上げていくことにしたい。

## 2　アーサー・エヴァンズによるクノッソス発掘

クノッソス遺跡は、ギリシア本土とエジプトの間にあるクレタ島で発見された古代遺跡で、現在それは、地中海文明の中でも最も古い文明のひとつである、ミノア文明に属するとされている（Fig. 1）。クノッソス遺跡の発見以後、クレタ島内に同様の遺跡が複数発見され、この文明の内容が次第に明らかになりつつある。

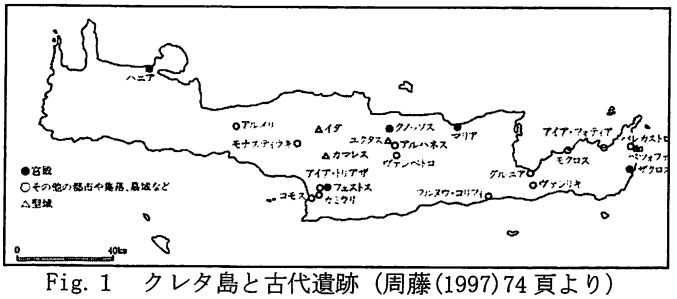

Fig. 1　クレタ島と古代遺跡（周藤(1997)74 頁より）

現在、その全容がわかっているのは、クノッソス、フェストス、マリア、ザクロスの 4 つの遺跡であるが、いずれも建築物の基本構造は一致している。ここから、クレタ島にはおそらくは単一の権力と発達した社会的組織が存在していたと推測される。

おそらくこの文明は、紀元前3000年代から次第に発展し、前2000年頃に宮殿が建設された頃にピークを迎え、その後500年にわたって繁栄を続けた後、おそらくは、サントリーニ島の火山爆発などの自然災害や、ミケーネ文明の進出の影響などで衰退していったものと考えられる[1]。クノッソス宮殿も、何度かの破壊と再建を繰り返している。

この文明の担い手がどのような人々であったのかについては、「線文字A」と呼ばれる古い時代の文字が、まだ解読されていないこともあり、よくわかっていない。また、時代的にエジプト文明との関係も気になるが、相互の交流をうかがわせる証拠はあるものの、具体的な関係はよくわかっていない[2]。

さて、このクノッソス遺跡を発掘し、ミノア文明を発見したのは、イギリス人のアーサー・エヴァンズ卿である。アーサー・エヴァンズ（1851-1941）は、考古学者ジョン・エヴァンズの息子として生まれ、オックスフォード大学などで学んだ。若い頃はジャーナリストをしていたが、1883年にギリシアを訪問し、シュリーマンがミケーネから発掘したばかりの発掘品を見て、魅了される。当時、ハインリッヒ・シュリーマン（1822-1890）はトロイア遺跡とミケーネ遺跡の発掘に成功し、時代の寵児であった。

最初、エヴァンズの関心は、古代の文字や印章にあった。彼はあるときアテネの骨董店で文字の刻まれた印章を見つけ、それがクレタ島の出土品であることを知る。クレタ島のケファラの丘に遺構が眠っていることはすでに知られており、シュリーマンも発掘を画策していたのだが、土地買収のトラブルで実現していなかった。エヴァンズは私財を投じてこの土地を買い、発掘を始める。1900年に発掘が始まると、思惑通り、巨大な建築物の遺構と、様々な遺物が次々と発見された。この発見は、ヨーロッパでセンセーショナルに報じられ、エヴァンズはたちまち時の人になっていく。エヴァンズは、その後の生涯をクノッソス遺跡の発掘とミノア文明の研究に捧げ、その研究成果は大著 *The Palace of Minos at Knossos* 全4巻（1921-36）にまとめられた。

エヴァンズ卿によるクノッソス遺跡発掘では、ミノア文明に対する先行イメージが存在し、それが発掘と復元の方向性を定めるという現象が起こっている。そして、その結果が、さらなるイメージ形成を促している。この点に注意して、三つの側面から問題を見ていくことにしよう。

## 3　クノッソスのイメージ形成におけるギリシア神話の影響

われわれは、まず、神話がイメージ形成に与えた影響について考えなければならない。発掘により、地下に眠っているのが巨大建築物であることが判明すると、エヴァンズの関心は、文字から、この地に存在していた古代文明そのものに移っていくことになった。この建築物の正体は一体何なのであろうか？　エヴァンズが注目したのは、有名なギリシア神話であった。その神話の主要部分をまとめると、次のようなものになる。

> ミノス王はポセイドン神からみごとな牡牛を与えられることで、クレタ島の王となる。その牡牛は神に捧げられるべきものであったが、王はそれを惜しみ、別の牡牛を捧げてしまう。怒った神は王妃パシパエが牡牛に恋をするように仕組み、その結果王妃は怪物ミノタウロスを産む。ミノス王は、伝説的名工ダイダロスに命じて迷宮ラビュリントスを建設させ、その中にミノタウロスを閉じ込めた。そ

1　ミノア文明の年代は、いわゆる「高編年」と「低編年」の二つの説が立てられている。周藤芳幸（1997）、第3章、周藤芳幸・澤田典子（2004）16-24頁を参照。

2　この点は、バナールの『黒いアテナ』など、古代地中海文明へのアフリカ（エジプト）文明の影響を重視する立場において強調されている。しかし、十分な証拠があるわけではない。

して、その頃クレタに支配されていたアテナイから若い男女７名ずつを、９年毎に貢物として送らせ、怪物の餌食にしていた。アテナイ王アイゲウスの息子テセウスは、若者の中に混じり、クレタ島に送られる。ミノス王の娘アリアドネはテセウスに恋をし、糸玉を渡して、ラビュリントスからの脱出方法を教える。テセウスは糸をほぐしながら迷宮を進み、ミノタウロスを退治したあと、ラビュリントスから無事脱出する。

エヴァンズによる発掘の結果、徐々に姿を現していった建築物は、中央に長方形の中庭が配置され、無数の小さな部屋が複雑に集まった複層の巨大な建築物であり、その構造はまるで迷路のようであった（Fig. 2）。エヴァンズは、これが伝説の迷宮ラビュリントスであると確信する[3]。遺跡からは、多数の「両刃の斧」のシンボルが発見された。彼は、語源が不明であったラビュリントス（Labyrinthos）という名前を、この斧（Labrys）に結びつけ、「両刃の斧の館」すなわちクノッソスこそ、ラビュリントスであると主張した[4]。

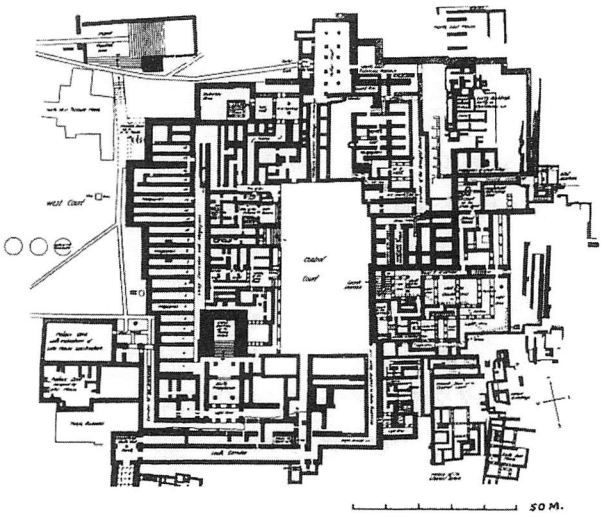


Fig. 2 クノッソス宮殿平面図（周藤（1997）83 頁より）

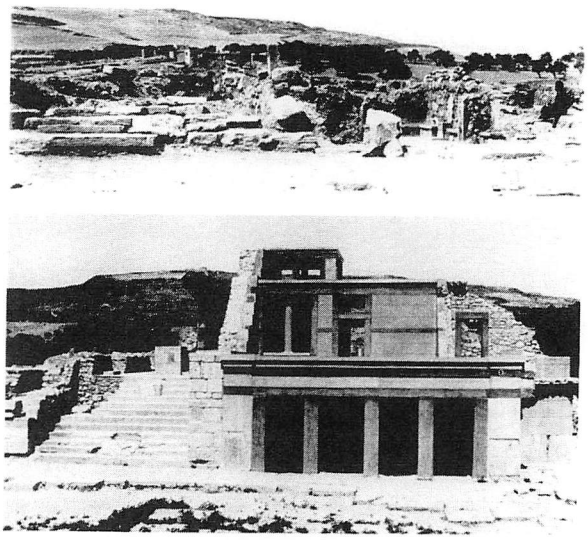

Fig. 3　玉座の間の復元前と後（Brown(1994)p. 52 より）

エヴァンズは、1900 年３月に、中央に石の椅子が置かれた部屋を発見する。その床には壁画の破片が散乱しており、そこには伝説の聖獣グリフォンが描かれていた。当初エヴァンズは、この部屋をアリアドネの部屋と見なそうとした。しかし、最終的に、この部屋は王の部屋であると認定した。彼はこの部屋の部分の復元を行う。これが現在「玉座の間（Throne Room）」と呼ばれる部分である[5]。当時撮影された写真を見ると、その徹底した復元の様子がよくわかる（Fig. 3）。その復元は、コンクリートなどの近代的な素材を使用して行われ、出土した当時の建築物のフレスコ画を参考に、さまざまな推測に基づいて為された。この復元作業は、当初から賛否両論を巻き起こし、批判の声も多かったが、エヴァンズはこの玉座

3　ここには、「迷宮」と「迷路」の概念的混同がみられるという。なぜなら、本来「迷宮（ラビュリントス）」とは入り組んではいるが、基本的に一本道だからである。その意味では、クノッソス宮殿の複雑に枝分かれした通路や階段は、迷宮の条件は満たさない。Cf. 和泉雅人 (2000) 、44-49 頁。

4　この語源解釈は、ドイツの考古学者マイヤーによって 1892 年に提唱されていた学説を基にしたものであるという。しかし、言語学的には、Labrys → Labyrinthos という音韻変化は説明できない。Cf. 和泉雅人 (2000) 、29-31 頁。

5　エヴァンズは、各部屋の具体的な機能を推定し、それぞれに具体的な名前を付けていった。この方法も、イメージ形成の問題と密接に関わっている。

の間だけでなく、他の主要部分も同様に復元を行っていった。これらの復元は、冬季の雨による遺跡の劣化を防ぐという点で大きな成果を挙げたが、しかしまた他方、この遺跡が近代的な作り変えであるという批判も呼び、重要な遺跡であるにも関わらず、いまだに世界遺産に登録されない理由にもなっている。

エヴァンズはこのようにして、遺跡を「宮殿」として「再建」していった。しかし、エヴァンズの発掘した建築物が、本当に「宮殿」だったという明確な証拠はない。実は、この遺跡からは多数の宗教的遺物が出土している。有名なのは、女神と推測される蛇を掲げた女性像であろう。また、中央の広場は、「牛跳び」などの宗教的儀式を行なう場所であったと推測されている。また、建物の大部分を占める無数の小部屋は、居室というよりも、むしろ貯蔵庫と見たほうがよさそうである。現在では、この遺跡は、王の居城というよりは、むしろ宗教的施設というべきであり、そこでは政治というよりは、宗教的コミュニケーションや、生産物の貯蔵と分配が行なわれていたという考えかたが有力になっている[6]。

エヴァンズは、当然、この問題に気づいていた。しかし、彼は神話に固執する。その結果、彼は、ミノス王は宗教的支配者でもあり、宗教的儀式を通じて民を支配する「神官王（priest king)」であったという説を立てるに至るのである。この神官王は、1921年に刊行された *The Palace of Minos at Knossos* 第1巻において中心的な役割を担う概念となっている。それによれば、この神官王は、神の末裔であるクノッソスの統治者であり、クレタ島で信仰されていた地母神の地上における養子なのである。この神官王を、エヴァンズはフリギアの女神キュベレの配偶者であるアッティス、あるいはアフロディテの恋人アドニスと同様の存在と見なした。エヴァンズのこのような推測は、古代宗教と王権をめぐる、当時広く普及していた、たとえばフレイザーなどの見方に影響を受けている。すなわち、世界を支配する地母神には、農耕サイクルを象徴する死と誕生を繰り返す男性神が仕えており、それが原始社会での王権の神性の基礎となっているというのである[7]。

このような解釈に根拠はあるのだろうか？　当時の政治体制を推測できる証拠が存在しない以上、これは、エヴァンズが神話と現実をすり合わせるために作り出したひとつのイメージであるといわざるをえないのである。

Fig.4　パリジェンヌ
(Ananiadis(2005)p.85 より)

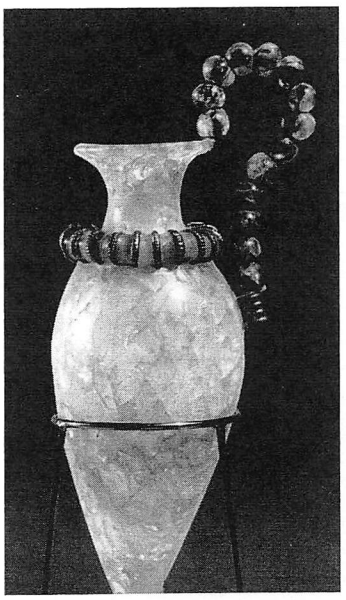

Fig. 5　蛸のアンフォラ（左）と水晶のリュトン（右）
（いずれもザクロスからの出土）

6　たとえば、Castleden(1990) など。

7　Cf. Sherratt(2000), p. 8.

## 4　クノッソスのイメージ形成とヨーロッパ文化

クノッソスのイメージ形成に影響を与えたのは、神話だけではない。当時のヨーロッパの美的意識が、そのイメージの形成に大きな影響を与えたことも周知の事実である。エヴァンズがクノッソス遺跡の発掘を始めた1900年前後は、ヨーロッパではアール・ヌーヴォーの時期であった。ヨーロッパの人々は、クノッソスで次々に発見される絵や壷に、自分たちと同じ美的趣味を感じ取る。もっとも有名なのは、「パリジェンヌ」（Campstool Frescoと呼ばれる壁画の断片の通称）であろう（Fig. 4）。この通称を付けたフランス人の学者エドモン・ポティエ（Edmond Pottier）は、「この波立った髪、この心を奪うようにカールした額の刺激的な巻き毛、この大きな目、赤紫で彩色されたこの官能的な唇。この赤と紫と黒の線のチュニック、この若い男を誘うように後ろに垂れ下がったリボンの洪水」と述べている[8]。このような現代的感覚で受け止められたミノア文明の出土品は、フレスコ画だけでなく、たとえば、アンフォラに描かれた蛸のデザインや、アールデコ調のリュトンなど、枚挙にいとまがない（Fig. 5）。

こうして、ヨーロッパはミノア文明を、自分たちの美的意識が先取りされた時代として、特別な目で見るようになっていく。そして、古代クレタ人の美的趣味は、彼らの「自然趣味」を表すものだと理解されるようになるのである。なぜなら、当時のヨーロッパと同様、彼らの美術も、自然の生物や植物に彩られていたからである。

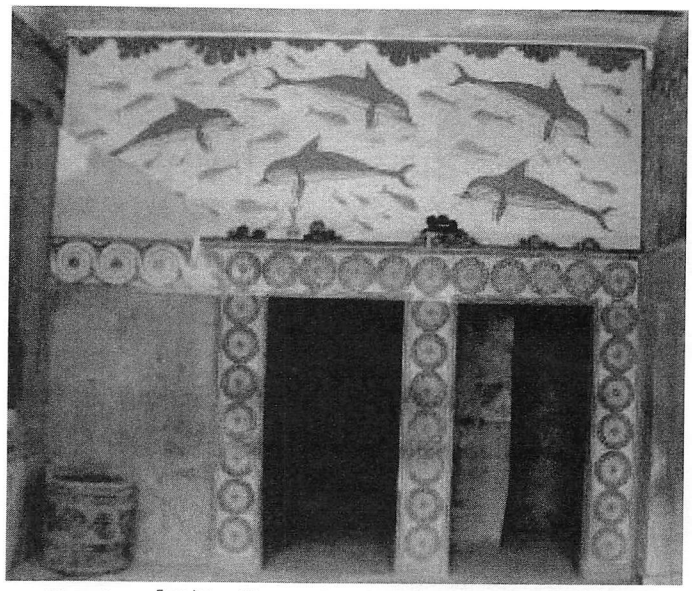

Fig. 6　「王妃の間」のイルカのフレスコ画（筆者撮影）

その代表的なものは、有名なイルカのフレスコ画（Dolphin Fresco）であろう（Fig. 6）。それは、「王妃の間」と呼ばれる部屋の壁画であるが、彼らの自然愛好を如実に示すものと考えられた。このイルカのイメージと、そこが王妃の部屋であるという想定は、ロマンチックなイメージを与えることになった。それは、この部屋の想像図として当時描かれたイラストを見れば一目瞭然であろう（Fig. 7）。

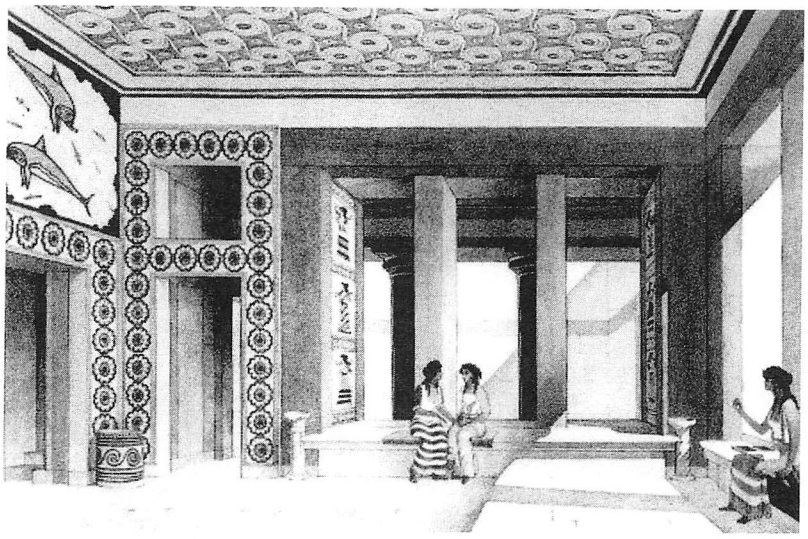

Fig. 7　「王妃の間」の想像図（Ananiadis(2005) p. 97より）

8　J. A. MacGillivray(2000), p. 205.

さて、こうしたイメージが出来上がると、今度は逆に、そのイメージがたとえば壁画の復元に影響を与えるという現象が起きてくる。クノッソス遺跡の壁画は保存状態が悪く、いってみれば、ジグソーパズルのピースがほとんど失われた状態であった。生き残ったピースがどこにはまり、それ以外の空白部分がどんな絵であったのかを推定するためには、想像力が必要なのである。ここに、先行イメージが影響を及ぼさないはずはない。

しかし、これがときに様々な間違いをもたらすことになる。代表的な例として、「サフランを集める人」と名づけられたフレスコ壁画を挙げることができる。エヴァンズは、人間が自然の中でサフラン摘みをするという図を再現した。この再現は、当時の文明が自然と調和していたというイメージが反映されたものである。しかし、その後の研究で、N. プラトンは断片の解釈に誤りがあることを見出し、現在ではより妥当な再構成が提示されている（Fig. 8）。

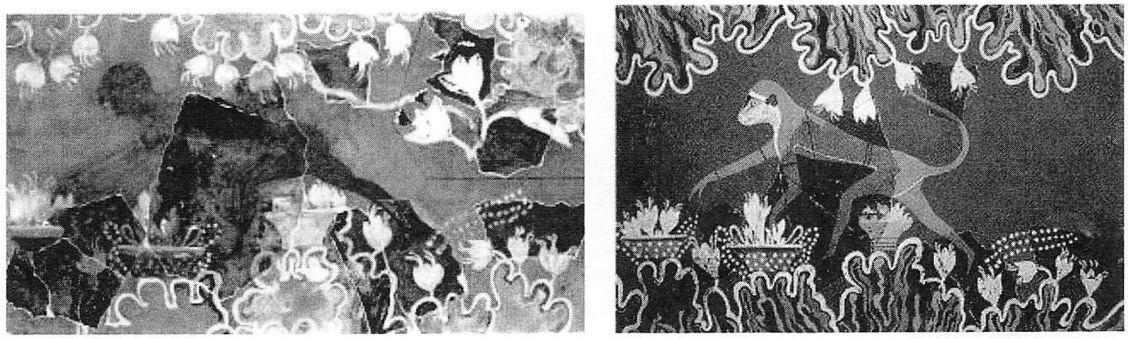

Fig. 8 「サフランを集める人」の二つの再構成
（Farnoux (1996) p. 76,77 より。右がプラトンによる案）

われわれは、いまでもこうしたイメージに支配されつつ、当時のクレタ島の文化を想像している。そのイメージは、正しいのであろうか、間違っているのであろうか？　断定する決め手はない。しかし、それがきわめて危ういものであることは確かであろう。たとえば、われわれにとっては、この壁画は「自然画」であると考えるのが自然であろうし、それはおのずから、エコロジカルなイメージを掻き立てる。しかし、また、古代社会において、イルカをはじめ、魚とか鳥などの生き物は、霊魂を冥界に導く存在であり、死の象徴であった可能性も否定できない[9]。そうであるとしたら、われわれの牧歌的なイメージは修正を迫られることになるかもしれないのである。

以上のように、エヴァンズによるフレスコ画修復の事例は、イメージ形成の構造とその問題性を浮き彫りにするものだといえるであろう。

## 5 「百合の王子」壁画の復元と神官王イメージの形成

最後に、クノッソス遺跡の壁画でももっとも有名な、しかも悪名高い「百合の王子（Prince of the lilies）」を見てみることにしたい。このフレスコ画は、クノッソス宮殿のイメージ形成において、きわめて重要な意味を持っている。というのは、エヴァンズは、このフレスコ画の再構成の中で、「神官王」のイメージを創りあげていったからである。

この壁画もまた、少数のピースしか発見されなかった。それらは、胸、腿、腕、百合の形象をあしらっ

9　たとえば、エヴァンズに異を唱え、クノッソス宮殿をネクロポリスとして捉えようとしたヴンダーリヒは、そのような解釈を取ろうとしている。ヴンダーリヒ（1975）、250 頁。

た冠と推定された。1901 年に発見されたとき、エヴァンズは、それぞれの断片は別の個体に属しており、一人は王冠をかぶった王、そして、胸の部分はボクサーであり、腿はそれとは別の人物に属すると考えていた。

しかし、壁画修復を担当していたスイスの修復家エミール・ジリエロン（Emile Gilliéron）は、胸、腿、腕、冠をすべて一人の人物の部分と考え、胸に手を当てて、腕には杖を持つ人物を再構成した。この再構成をエヴァンズは受け入れ、それを、クノッソス宮殿の主である神官王のイメージに重ねていった。最終的に、それは、王が聖獣グリフォンを王宮に導くシーンを描いていると推定された。そして、他の断片から、王は、蝶の舞う百合の園の中を行進していると考えられた。こうした解釈に基づく復元図は、1926 年に刊行されたエヴァンズの *The Palace of Minos at Knossos* 第 2 巻において発表された（Fig. 9）。そこで、エヴァンズは、蝶を霊魂の象徴としてとらえ、王が進む百合の園はエリュシオンであると考えている。また、王の被る百合の冠は、彼が地上での女神の代理人であることを示している。こうして、この建築物を支配する、宗教指導者としての王のヴィジュアルなイメージが形成されていくことになったのである[10]。

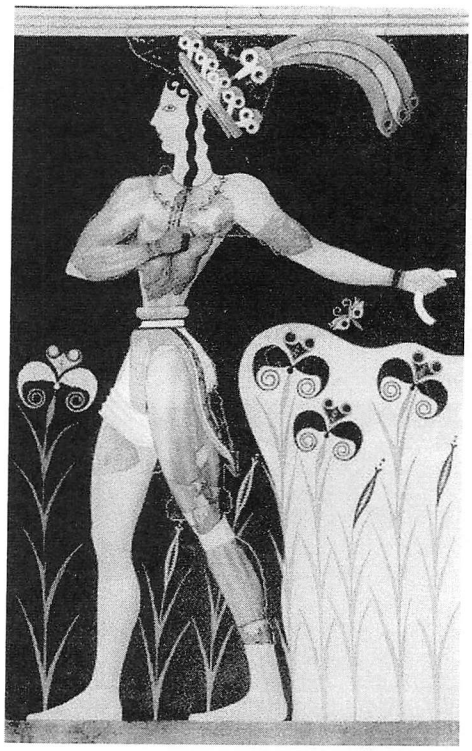

Fig. 9　百合の王子

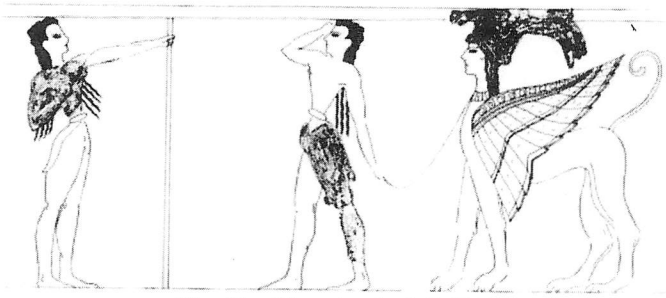

Fig. 10　Niemeier による復元案

この復元は、当時からさまざまな疑いを投げかれられていた。とりわけ、断片を一人の人物にまとめると、胸の部分の筋肉が不自然になってしまうのである。その場合、少なくとも胸の部分と腿の部分は別の人物に配されなければならなくなる。また、仮にこの人物が王だったとしても、このような冠を被っていた証拠はない。1904 年にクノッソス近くの墓から出土した遺品からは、羽のある冠を被るスフィンクス像が発見されており[11]、問題の画でも、冠を被っていたのは、聖獣であるのかもしれない（Fig.10）。Fig.10 に見られる新しい復元案は、依然としてエヴァンズの当初の「神官王」イメージの延長線上にある。しかし、実際には、それはまったく異なる種類の人物を描いたものだったのかもしれない。たとえば、それは、エヴァンズが最初に想定したように、ボクサーを描いたものであったかもしれない。その他にも、多様な可能性が存在するのである。

10　このフレスコ画の復元の経緯については、Cf. Sherratt(2000) を参考にした。

11　Sherratt(2000), pp. 14-15.

しかし、こうしたさまざまな疑いが投げかけられているにもかかわらず、ジリエロンの描き出した「神官王」のイメージはあまりにも鮮烈であり、その強烈な印象ゆえに、われわれは、いまだにそのイメージから完全に自由になることができないのである。

## 6　おわりに

エヴァンズは、クノッソスに対する先行イメージからクノッソス遺跡の再構成をおこなった。そのイメージは、遺跡の再現のあり方に大きな影響を与えたが、それによって作られた遺跡や壁画の再構成は、さらに新たなイメージを生み出し、もとのイメージをさらに強化していくはたらきを果たした。ここでは、発掘・復元とイメージ形成は表裏一体であり、分かちがたく結びついている。そして、このようにして再現された「クノッソス宮殿」の姿は、今度はそこを訪れた見学者たちが、それを実際に見て経験するという行為をとおして、イメージを再生産させていく場として機能することになるのである。

われわれは、そのようにして形成され、われわれの中に定着するイメージが、いかに強力なものであり、いかにわれわれを支配しているかに気づく必要があるだろう。たとえば、2004年のアテネオリンピックの開会式において、「水時計（Clepsydra）」と題されたエキシビジョンがおこなわれた。そこでは、ギリシアの歴史的記憶がイメージ化された行進がおこなわれたが、そこには、今回取り上げた、グリフォンを連れた「百合の王子」や、イルカのシーン、あるいは自然を愛好する古代クレタ人たちが登場している。これはもはや、ギリシアにとって、なくてはならないイメージになっているのである（Fig. 11）。

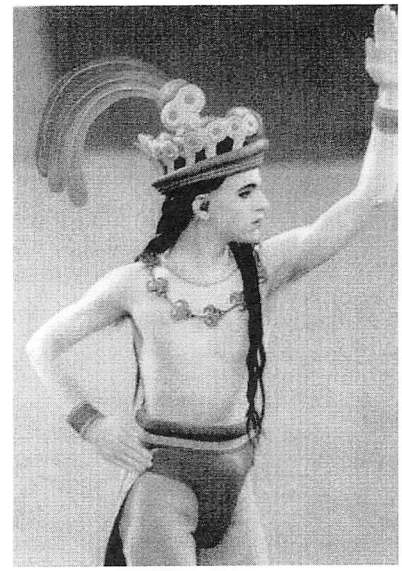

Fig. 11　アテネオリンピック開会式
(Hamilakis (2009) p. 5 より)

たしかに、クノッソス遺跡の事例は、この現象が特に顕著に現れている事例であり、ある意味で特殊な事例であるといえるのかもしれない。知識や技術の進歩した現代であれば、こんな極端なことは起こらないかもしれない。しかし、遺跡の発掘と復元とは、われわれの知識を介して、われわれにとって未知なものに対するイメージを形成していく作業にほかならない。その意味では、程度の差はあれ、今回述べたような現象は、どんな場合においても生じうるのだと考えるべきなのである。

文献表

D. Ananiadis, *Knossos: The Heart of the Minoan Civilization*, M.Toubis, 2005.

A. Brown, *Arthur Evans and the Palace of Minos*, Ashmolean Museum, 1994.

R. Castleden, *The Knossos Labyrinth: A New View of the "Palace of Minos" at Knossos*, Routledge, 1990.

A. Farnoux, *Knossos: Searching for the Legendry Palace of King Minos*, Harry N. Avbrams, 1996.

Y. Hamilakis, *The Nation and Its Ruins*, Oxford, 2009.

W-D. Niemeier, "Das Stuckrelief des >Prinzen mit der Federkrone< aus Knossos und minoische Götterdarstellungen," *Athenische Mitteilungen* 102, 1987, 65-98.

J. A. Sakellarakis, *Herakleion Museum Illustrated Guide,* Athens, 1978.

和泉雅人、『迷宮学入門』、講談社現代新書、2000 年。

ハンス・ゲオルク・ヴンダーリヒ、関楠生訳、『迷宮に死者は住む』、新潮社、1975 年。

周藤芳幸、『ギリシアの考古学』、同成社、1997 年。

周藤芳幸・澤田典子、『古代ギリシア遺跡事典』、東京堂出版、2004 年。

M・バナール著、金井和子訳、『黒いアテナ　古典文明のアフロ・アジア的ルーツ』上・下、藤原書店、2005 年。

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 20 年度～平成 24 年度）」によって行われた。